

幼保施設を対象とした体系的な防災教育の開発

政策・メディア研究科 修士課程 2 年

EG 大木聖子研究会

森 理紗子

1. 研究概要

東日本大震災以降、防災教育の重要性が見直され、義務教育過程ではさまざまな教材が開発されている。一方で、未就学児を対象とした教材開発や人材教育については依然として整備が進んでいない。幼保施設は小中学校と比べカリキュラム編成の柔軟性が高く取り組みやすいものの、発達段階に応じた教材を作成するには、専門家と現場教員の協働が不可欠である。本研究では共同実践に基づき、知識の獲得やリスク認知、行動変容の関係を明らかにし、乳幼児向けのパッケージ化された防災コンテンツの作成を行う。また、子どもの認知が社会構成主義的である点に着目し、社会構成主義に基づいたサイエンス及びリスクのコミュニケーションのあり方も研究する。

2. 研究の意義

未就学児への防災教育は以下の点から、社会全体の災害リスクを低減させることに効果が期待できる。すなわち、保護者のリスク認知は子どもが幼いときほど高いこと。幼いうちに学習するほど身体への定着が良いこと、小中学校での防災教育は時間の制約があって十分に指導が行き渡らないため基本的な対処行動は就学前に身につけるべきこと、である。以上が本研究の社会的意義である。防災教育の効果測定は、究極的には発災時にしか測れない。この非現実的な測定方法を克服するため、正統的周辺参加理論やグループ・ダイナミクス理論を援用する。さらに、広い視点で、社会構成主義に着目したい。社会構成主義とは、対象そのものが意味を持つのではなく、意味は社会的に構成されていく、つまり関係性の中で意味というものが定まっていく、という考え方である(ガーゲン, 2004)。子どもが意味を獲得していく過程はまさに社会構成主義的である。このことは、子どもがどのように地震や災害、防災を理解するかを研究することで、それを大人への防災に関わるコミュニケーションに援用できる可能性があることを示唆しており、地震災害のリスク・コミュニケーション研究における新たな視点となる。

3. 研究手法

未就学児の防災訓練で大切なことは、子どもたち自身が、1)災害の実態をおぼろげにでも理解し

て、突然の災害にも過度に動揺しない知識・心を育むこと、2)適切な保護が受けられるようになるようになるまで、最低限自分の命を守り続けられる術を学び、危険を回避できる状況判断力を育むこと、とされる(Gakken, 2006)。これらを踏まえ、幼保施設を対象とした効果的な防災訓練を探るべく、フィールドワークを実施した。共同実践は、2019年6月から2022年2月現在まで継続的に行われている。月一回定期的に行われている防災訓練を共同で運営する。共同実践の目標は、1)発災時、子どもたちが自主的に防災行動を取れるようになること、2)教職員が自信を持てる、効果を実感できるような防災訓練を実施すること、の二点とした。これらの目標は、研究者である大木研究会とフィールド先の教職員にとって共通するものであり、現在に至るまで、同じ目標を掲げ、共同実践を行ってきた。このような、「望ましいと考える社会的状態の実現を目指して研究者と研究対象者とが展開する共同的社会実践」をアクションリサーチという(矢守, 2010)。

#### 4. 研究結果・考察

3年にわたる防災教育を経て、教職員の参加姿勢が、より主体的・十全的なものへと変化した。また、フィールドの未就学児の多くが、予告なく緊急地震速報の報知音が流れた場合も、自主的に命を守るポーズを取れるようになった。年中長の子どもが、年下や保護者に対し、防災行動を伝える様子も確認でき、現在では、参加者同士が高めあうことのできる実践共同体が完成している。

フィールドワークの結果、未就学児が突発的な災害に対応できるようになるためには、教職員と子どもたちが訓練を通し前向きに学んでいくこと、すなわち、「園全体が実践共同体になること」が必要であると明らかになった。そのためには、繰り返し参加できる訓練を作り上げることが必要となる。未就学児は、訓練への参加(正統的周辺参加)を繰り返し、社会構成主義的に、自らにとって実態のない地震を想像する。大人は、自らの姿勢をもって、「訓練とは、真剣に臨むものである」と伝える。参加者全員が学びながら成長できる空間を目指し訓練を作り上げることが、未就学児が突発的な災害に対応できる力を身につける上で、重要となることを見出した。

#### 5. 謝辞

この度は、2021年度森泰吉郎記念研究振興基金に採択いただき、ありがとうございました。研究活動を進める中で必要となる機材を購入することにより、訓練動画の撮影から編集までを円滑に進めることができました。本研究の意義にご理解いただき、ご支援いただいたことは非常に嬉しく、身の引き締まる思いでございます。この度は、本当にありがとうございました。

#### 6. 参考文献

- Gakken (2006). 地震なんかには負けない！幼稚園・保育園・家庭防災ハンドブッカー子どもの命を守るための防災マニュアル。 (社)土木学会。p97.

- 矢守克也. (2010). 『アクションリサーチ -実践する人間科学』. 新曜社.
- ケネス・J・ガーゲン. 東村知子. (2004). あなたの社会構成主義. ナカニシヤ出版. 378p
- 矢守克也. (2013). 巨大災害のリスク・コミュニケーション. ミネルヴァ書房.